

連合野ハンドブック 完全版

神経科学×神経心理学で理解する大脳機能局在

河村 満【編】

評者

北澤 茂

大阪大学大学院医学系研究科生理学講座



私は生理学の教師をしているのだが、「連合野」には苦手意識があることを告白する。「感覚野」や「運動野」に比べて「連合野」のなんと教えにくいことか。『医学大辞典』（医学書院）によれば大脳連合野とは「第一次感覚野と第一次運動野を除く大脳皮質領域」であるという。つまり「教えやすい領域を除いた残り」が連合野なのだ。しかし、本書のおかげで、「連合野」が私の得意分野に生まれ変わるかもしれない。

まず、序章が素晴らしい。「連合」という言葉に込められた思想の歴史が、19世紀後半のマイネルト（マイネルト基底核のマイネルト！）にさかのぼって活写されている。序章を読んで目を見張ったのは、マイネルト、フレクシビ、デジュリン、ゲシュヴィンドという連合野の巨人たちが皆「線維」に注目していた、という事実である。マイネルトの自著の表紙に掲げられた大脳内側面には剖出された連合線維が描かれていた。フレクシビは線維の髄鞘形成の順序に着目して脳地図をつくった。デジュリンは自身の脳解剖アトラスに白質内の神経路を精緻に描き込んだ。ゲシュヴィンドはフレク

シビの「連合」概念を引用して連合線維の切断によって生じる臨床症候を「離断症候群」として理論化した。

本書は「前頭連合野」「頭頂連合野」「側頭連合野」の3パートで編成されている。いずれのパートも「神経解剖学」から始まる。そこに詳細な「連合線維」が描かれているのは「連合」の歴史を踏まえば当然のことである。局在する機能を営む連合野の領域の1つ1つが、連合線維が形づくる大脳皮質ネットワークのハブ（要衝）なのだ。

「神経解剖学」に続く各論の特徴の第一は機能別編成になっていることである。前頭連合野は「認知」「運動」「言語」「情動・動機づけ」の4機能。頭頂連合野は「身体知覚」「空間知覚」「運動視」の3機能。側頭連合野は「視覚情報処理」と「聴覚情報処理」の2機能である。焦点が絞られていてわかりやすい。そして2つ目の、おそらく最大の特徴は、それぞれの機能が「基礎編」と「症候編」のペアになっていることである。神経科学者が解説する基礎編と、臨床の専門家が解説する症候編が、互いに引用し合うことで有機的に

結び付いている。そのため、両者を一読するだけで連合機能が腑に落ちていく。副題の『神経科学×神経心理学で理解する大脳機能局在』に偽りが無いことを私は身をもって体験した。

ハンドブックという言葉のとおり、気軽に手に取って、知りたい機能の基礎編と症候編をペアで読むというのが1つの読み方である。基礎と臨床のいずれの専門家でも、極めて得るところが大きいだろう。しかし、私が教える医学部の学生には、序章から終章までの通読を勧めたい。壮大な「連合野」の全体像が、思想的な背景から将来の展望も含めて、若い頭脳の中に構築されること請け合いである。もちろん、医学生に限らない。神経科学を志すすべての学徒に一読を、心からお薦めしたい。

B5・頁 322

2021年4月

定価：9,900円（本体9,000円＋税）

[ISBN978-4-260-04343-4]

医学書院刊